「校歌作詞者・吉 成 新 太 郎 先 生 を 偲 ぶ」(※1)

高普第３回卒　門 馬　孝 義 (※2)

昭和 30 年頃、職員旅行で大島に出掛けた。東京竹島桟橋を出航して、早朝大島岡田港に入港した時、突然船内放送で呼び出された。

「案内の方が陸で待っているので、此処で下船して下さい。」言われて、事情もよく判らないまま一同下船したが、旅程外のことで不安を感じながらの上陸ではあった。すると初老の紳士が近づいてきて私を呼び、「私だよ。私が案内する。」と話しかけてきた。

訝しげな私の顔を見て、紳士はニコニコと笑いながら、「忘れたのかね。私だよ、吉成 (※3) だよ。」と言われて、私は突然十数年前幼少の頃の記憶が戻り、懐かしい気持で一杯になった。

当時私の一家は、台湾の台北市に住んでいて、吉成先生は、私の父と親交があり、時々ご夫妻でお見えになられた。ご夫妻とも温かく飄々としたお人柄で、小学生だった私にも良く話しかけて下さった。その頃吉成先生は、旧制台湾高校（台湾では１校だけ）に勤務しておられ、教頭だったと父に聞かされたことがある。

我が家に来られる度に「しっかり勉強しなさい。」と声をかけられたが、当時は旧制高校の初等科（小学校から受験）が最大の難関で、それを目指せと言われる度に寒気がしたものであった。「うちの高校（台湾高校）の上位合格者の大部分は台湾人だよ。日本人はもっとガンバらなきゃ。」と励まされたことを思い出す。

思い出はともかく、降って湧いたように十数年の時空をこえて出現した「吉成の小父さん」に驚いている私に、「君の父上からの手紙で、今日のことを知ったので案内に出てきたのだよ。（先生は元村という岡田港から離れた島の中心地にお住まいだった。）とにかく出発しよう。」ということで、一同を促し三原山を目指して出発した。途中戦後ご子息の居るこの大島に住んでいること、そのご子息が御神火茶屋を営んでいること、奥様は今でもお元気で、元村で再会を楽しみにしていること、三原山への登山は、岡田からの方が順路である等々、話をお聞きしながら登っていった。最早老境（失礼ながら）の先生だが、足取りも軽やかで昔と同じく飄々とした話ぶりで楽しかった。

途中「君は故郷に帰ってから相馬中学校を卒業したのかね。」と問われ、何故相馬中学校をご存じなのかと驚いてお聞きしたところ、その昔相馬中学校で教鞭をとったことがあるとのお話で二度

喫驚した。さらに「相馬中学校は今でも昔のままの校歌を歌っているのかね。」と尋ねられ、「ハイ、そうです。」と返事した途端、校歌の作詞者が『吉成新太郎』とあったことを思い出した。迂闊ながらこの『吉成の小父さん』と呼んでいたこの方が、校歌作詞者であったとは、考えもしなかったことで本当に喫驚した。現在の相馬高校のこと、中村の町のこと等いろいろ話したが、とても楽しそうだった。又「今では同窓九百でもないだろうに。」と言って楽しそうに笑われた。

その後一同御神火茶屋で休憩し、三原山を見て元村に下山し一泊したが、終始先生は、ご一緒してつかれも見せられなかった。元村では奥様も宿に見えて楽しく過ごしたが、翌朝元村港まで見送りをいただき、温かくも懐かしいひとときであった。

帰ってきて父に報告したところ、元村からあの朝早く出迎えるためには、前の晩岡田に泊まって下さったのだろう。あの方はそういう誠実な人だと聞かされた。
今でもあのときの先生の風貌を思い出す度、ほのぼのとした温かい人柄を偲ぶのである。

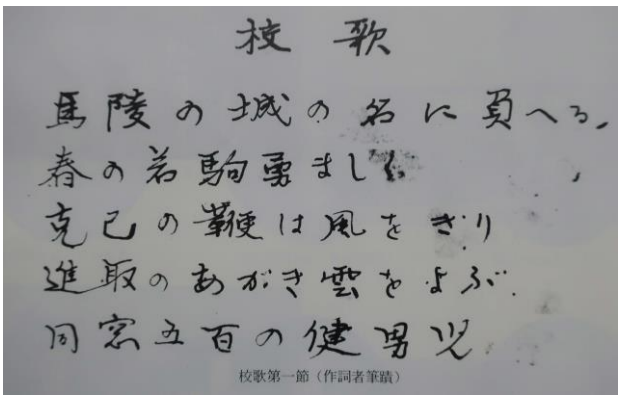
「・・・実際はもっとおだやかな感じがしていたのですが、写真とはむづかしいものでございます。」
（写真を提供された娘レイ子さんの手紙より）（昭和 53 年）

（※1）『 紅の旗　創立百十周年記念誌 』　〈 2009（平成 21）年 1 月発行 〉
「校歌百年〈相中・相高を貫く精神 － 校歌〉より」。特別寄稿文。

（※2）旧姓 斎藤。鹿島出身。昭和 26（1951）年卒。福大（学）。元小高中学校長。

（※3）吉成新太郎。相中教諭：明治 38（1905）年～大正 7（1918）年、歴史/国/漢。

創立 80 周年を記念して、校歌碑が建立されたが、その碑文は遺品のノートに書かれていた歌詞を拡大して刻んだものである。　⇒
（記念誌「相中相高八十年」より）



吉成新太郎教諭は「秋田県の特徴ある訥々たる弁を以て熱心に授業に当られ」、生徒たちから“ツミ”というニックネームをつけられながら、寄宿舎の舎監も兼任したりして、山口県立室積中学校に転出する 1918（大正 7）年 2 月まで 12 年間も本校に勤務し、晩年には病床に臥してからも相馬中学を懐しんで、家族にピアノで校歌を弾かせたりしていたという。そして、1962 年 2 月 10 日東京都大島町で 81 歳の高齢をもって永眠されたとのことである。（第 7 回生渡邊宗重 (※4)、『相高新聞』）
（記念誌「相中相高八十年」より）

（※4）中村出身。明治 42（1909）年卒。北大実。

（ 転記&※脚注　村山 ）